

校異源氏物語・さか木

齋宮の御くたりちかう成ゆくまゝに御息所のこゝろほそくおもほすやむこと
なくわつらはしきものにおほえたまへりし大殿の君もうせ給てのちさりととも
世人もきこえあつかひ宮のうちにも心ときめきせしをそのゝちしもかきたえあ
さましき御もてなしをみ給にまことにうしとおほす事こそありけめとしりはて
給ぬればよろつのあはれをおほしすてゝひたみちにいてたち給おやそひくたり
給れいもことになれれといとみはなちかたき御ありさまなるにつけてうき
世を行はなれむとおほすに大将の君さすかにいまはとかけはなれ給なむもくち
おしくおほされて御せうそこはかりはあはれなるさまにてたひくかよふたい
めし給はんことをはいまさらにあるましきことゝ女君もおほす人は心つきなし
と思をき給事もあらむにわれはいますこしおもひみたるゝ事のまさるへきをあ
いなしと心つよくおほすなるへしもとの殿にはあからさまにわたり給おりく
あれといったうしのひたまへは大将殿えしり給はすたはやすく御心にまかせてま
うてたまふへき御すみかにはたあらねはおほつかなくて月日もへたゝりぬるに
院のうへおとろくしき御なやみにはあらてれいならず時くなやませ給へは
いとゝ御心のいとまなれとつらき物に思はて給なむもいとおしく人きゝなさ
けなくやとおほしをこして野の宮にまうて給九月七日はかりなれはむけにけふ
あすとおほすに女かたも心あはたゝしけれとたちなからとたひく御せうそこ
ありければいてやとおほしわつらひなからいとあまりうもれいたきを物こし
はかりのたいめはと人しれすまちきこえ給けりはるけきのへをわけいり給より
いどものあはれなり秋の花みなおとろへつゝあさちか原もかれくくなるむしの
ねに松風すこく吹あはせてそのことゝもきゝわかれぬほとにものゝねともたえ
くきこえたるいとえんなりむつましきこせむ十よ人はかりみすいしむこと
くしきすかたならていたうしのひ給へれとことにひきつくろひ給へる御よう
いゝとめてたくみえ給へは御ともなるすきものとも所からさへ身にしみて思へ
り御心にもなとていままでたちならさゝりつらむとすぎぬるかたくやしうおほ
さるものはかなけなるこしはかきをおほかきにていたやともあたりあたりいと
かりそめなりくろ木のとりゑともさすかにかうくしうみわたされてわつらは

しきけしきなるにかむつかさの物ともこゝかしこにうちしはふきてをのかとち
ものうちいひたるけはひなともほかにはさまかはりてみゆひたきやかすかにひ
かりて人けすくなくしめくとしてこゝにもの思はしき人の月日をへたて給へ
らむほどをおほしやるにいとみしうあはれに心くるしきたのたいのさるへき
所にたちかくれ給ひて御せうそこきこえ給にあそひはみなやめて心にきけは
ひあまたきこゆなにくれの人つての御せうそこはかりにて身つからはたいめし
給へきさまにもあらねはいとものしとおほしてかうやうのありきもいまはつき
なきほどになりにて侍をおもほししらはかうしめのほかにはもてなし給はてい
ふせう侍事をもあきらめ侍にしかなとまめやかにきこえ給へは人々けにいとか
たはらいたうたちわつらはせ給にいとおしうなとあつかひきこゆれはいさやこ
ゝの人めもみくるしうかのおほさむこともわか／＼しういてゐんかいまさらに
つゝましきことゝおほすにいとものうけれとなさけなうもてなさむにもたけか
らねはとかくうちなけきやすらひてゐさりいて給へる御けはひいと心にくしこ
なたはすのこはかりのゆるされは侍りやとてのほりい給へりはなやかにさしい
てたるゆふつくよにうちふるまひ給へるさまにほひににるものなくめてたし月
ころのつもりをつき／＼しうきこえ給はむもまはゆき程になりにつければさか木
をいさゝかおりても給へりけるをさしいれてかはらぬ色をしるへにてこそいか
きもこえ侍にけれさも心うくときこえ給へは

神かきはしるしのすきもなきものをいかにまかへておれるさか木そときこ
え給へは

をとめこかあたりとおもへはさか木はの香をなつかしみとめてこそおれお
ほかたのけはひわつらはしけれとみすはかりはひききてなけしにおしかゝりて
ゐる給へり心にまかせてみたてまつりつへく人もしたひさまにおほしたりつと
し月はのとなりつる御心おこりにさしもおほされさきまた心のうちにいか
にそやきすありて思きこえ給にしのちはたあはれもさめつゝかく御中もへたゝ
りぬるをめつらしき御たいめのむかしおほえたるにあはれとおほしみたるゝ事
かきりなししかたゆくさきおほしつゝけられて心よはくなき給ぬ女はさしも
みえしとおほしつゝむめれとえしのひ給はぬ御けしきをいよく心くるしうな
をおほしとまるへきさまにそきこえ給める月もいりぬるにやあはれなる空をな
かめつゝうらみきこえ給にこゝら思ひあつめ給へるつらさもきえぬへしやう
／＼いまはとおもひはなれ給へるにされはよと中／＼心うこきておほしみたる
殿上のわかきむたちなとうちつれてとかくたちわつらふなるにはのたたすまひ

もけにえんなるかたにうけはりたるありさまなりおもほしのこすことなき御なからひにきこえかはし給事ともまねひやらむかたなしやうくあけ行空のけしきことさらにつくりいてたらむやう也

あかつきのわかれはいつも露けきをこは世にしらぬ秋の空かないてかてに御てをとらへてやすらひ給へるいみしうなつかしかせいとひやゝかに吹て松むしのなきからしたるこゑもおりしりかほなるをさして思事なきたにきゝすくしかたけなるにましてわりなき御こゝろまとひとみに中くこともゆかぬにや

おほかたの秋のわかれもかなしきになくねなそへそのへのまつむしくやしき事おほかれとかひなければあけ行空もはしたなふていて給みちのほといと露けし女もえ心つよからすなこりあはれにてななめ給ほのみたてまつり給へる月影の御かたち猶とまれるにほひなどわかき人ゝは身にしめてあやまちもしつへくめてきこゆいかはかりのみにてかかゝる御ありさまをみすてゝはわかれきこえんとあいなく涙くみあへり御ふみつねよりもこまやかなるはおほしなひくはかりなれと又うちかへしためかね給へき事ならねはいとかひなしおとこはさしもおほさぬ事をたになさけのためにはよくいひつゝけ給ふへかめれはましてをしなへてのつらには思ひきこえ給はさりし御なかのかくてそむき給なんとするをくちおしうもいとをしうもおほしなやむへしたひの御さうそくよりはしめ人ゝのまてなにくれの御てうとなとかめしうめつらしきさまにてとふらひきこえ給へとなにともおほされすあはくしう心うきなをのみなかつてあさましき身のありさまをいまはしめたらむやうにほとちかくなるまゝにおきふしなけき給齋宮はわかき御心ちにふちやうなりつる御いてたちのかくさたまりゆくをうれしとのみおほしたり世人はれるなき事ともときもあはれかりもさまくきにきこゆへしなにことも人にもときあつかはれぬきはゝやすけなりなかく世にぬけいてぬる人の御あたりはところせきことおほくなむ十六日かつら河にて御はらへし給つねのきしきにまさりて長ふそうしなどさらぬかむたちめもやむことなくおほえあるをえらせ給へり院の御心よせもあれはなるへしいて給ふ程に大将殿よりれいのつきせぬ事ともきこえ給へりかけまくもかしこきおまへにてとゆふにつけてなる神たにこそ

やしまるくにつみ神もこゝろあらはあかぬわかれの中をことはれおもふたまふるにあかぬ心ちし侍かなとありいとさはかしきほとなれと御かへりあり宮の御をは女へたうしてかゝせ給へり

くにつかみ空にことはる中ならはなをさりことをまつやたゝさむ大将は御

ありさまゆかしうてうちにもまいらまほしくおほせとうちすてられてみくらむも人わろき心ちし給へはおほしとまりてつれ／＼になかめ給へり宮の御かへりのおとな／＼しきをほをゑみてみる給へり御としのほとよりはおかしうもおはすへきかなとたゝならすかうやうにれいにたかへるわつらはしさにかならず心かゝる御くせにていとうみたてまつりつへかりしいはけなき御ほとをみすなりぬるこそねたけれ世中さためなければたいめするやうもありなむかしなとおほす心にくゝよしある御けはひなれはものみくるまおほかるひなりさるの時にうちにまいり給宮すん所御こしにのり給へるにつけてもちゝおとゝのかきりなきすちにおほし心さしていづきたてまつり給しありさまかはりてすゑの世にうちをみ給にもものゝみつきせすあはれにおほさる十六にてこ宮にまいり給て廿にてをくれたてまつり給卅にてそけふまたこゝのへをみ給ける

そのかみをけふはかけしとしのふれと心のうちにもものそかなしき齋宮は十四にそなり給けるいとうつくしうおはするさまをうるはしうしたて／＼まつり給へるそいとゆゝしきまてみえ給をみかと御心うこきてわかれのくしたてまつり給ほといとあはれにてしほたれさせ給ぬいて給をまちたてまつるとて八省にたてつゝけたるいたし車とものそてくち色あひもめなれぬさまに心にくきけしきなれば殿上人ともゝわたくしのわかれおしむおほかりくらういて給て二条よりとうあむのおほちをおれ給ふほど二条の院のまへなれば大将の君いとあはれにおほされてさかきにさして

ふりすてゝけふはゆくともすゝか河やそせの浪に袖はぬれしやときこえ給へれといとくらうものさはかしき程なれば又の日せきのあなたよりそ御返しある

すゝか河やそせのなみにぬれ／＼すいせまてたれかおもひをこせむことそきてかき給へるしも御ていとよし／＼しくなまめきたるにあはれるけをすこしそへ給へらましかはとおほすきりいたうふりてたたならぬあさほらけにうちなかめてひとりこちおはす

ゆくかたをなかもやらむこの秋はあふさか山を霧なへたてそにしのたいにもわたり給はてひとやりならすものさひしけになかめくらし給まして旅の空はいかに御心つくしなる事おほかりけん院の御なやみ神な月になりてはいとおもくおはします世中におしみきこえぬ人なしうちにもおほしなきて行幸ありよはき御心ちにも春宮御事をかへす／＼きこえさせ給てつきには大将の御事侍つる世にかはらす大小のことをへたてすなにもこと御うしろみとおほせよはひ

のほとよりはよをまつりこたむにもおさくは、かりあるましうなむみ給ふる
かならず世中たもつへきさうある人なりさるによりてわつらはしさにみこにも
なさすたゝ人にておほやけの御うしろみをせさせむと思給へしなりその心たか
へさせ給なとあはれるなる御ゆいこむともおほかりけれと女のまねふへきことに
しあらねはこのかたはしたにかたはらいたしみかともいとかなしとおほしてさ
らにたかへきこえさすましきよしをかへすくきこえさせ給御かたちもいとき
よらにねひまさらせ給へるをうれしくたのしくみたまつらせ給かきりあれ
はいそきかへらせ給にもなかくなる事おほくなん春宮もひとたひにとおほし
めしけれどものさはかしきによりひをかへてわたらせ給へり御としのほどより
はおとなひうつくしき御さまにて恋しとおもひきこえさせ給けるつもりになに
心もなくうれしとおほしみたまつり給ふ御けしきいとあはれなり中宮は涙に
しつみ給へるをみてたまつらせ給もさまく御心みたれておほしめさるよろつ
のことをきこえしらせ給へといと物はかなき御ほとなれはうしろめたくかなし
とみたまつらせ給大將にもおほやけにつかうまつり給へき御心つかひこの宮
の御うしろみし給へきことをかへすくの給はす夜ふけてそかへらせ給のこる
人なくつかうまつりてのゝしるさま行幸におとるけちめなしあかぬほとにてか
へらせ給をいみしうおほしめすおほきさきもまいり給はむとするを中宮のかく
そひおはするに御心をかれておほしやすらふほとにおとろくしきさまにもお
はしましてかくれさせ給ぬあしを空に思まどふ人おほかり御くらゐをさらせ給
といふはかりにこそあれよのまつりことをしつめさせ給へる事も我御世のおな
し事にておはしまいつるをみかとはいとわかうおはしますおほちおとゝいとき
うにさかなくおはしてその御まゝになりなん世をいかならむとかむたちめ殿上
人みなおもひななく中宮大將殿などはましてすぐれてものもおほしわかれすの
ちくの御わさなとけうしつかうまつり給さまもそこらのみこたちの御中にす
くれたまへるをことはりなからいとあはれに世人もみたまつる藤の御そにや
つれ給へるにつけてもかきりなくきよらに心くるしけなりこそことしとうちつ
ゝきかゝる事をみ給によもいとあちきなうおほさるれとかかるついてにもまつ
おほしたたるゝ事はあれと又さまくの御ほたしおほかり御四十九日までは女
御みやす所たちみな院につとひ給へりつるをすきぬれはちりくにまかて給し
はすの廿日なれはおほかたのよの中とちむる空のけしきにつけてもましてはる
ゝよなき中宮の御心のうちなりおほきさきの御心もしり給へれば心にまかせ給
へらむ世のはしたなくすみうからむをおほすよりもなれきこえ給へるとしころ

の御ありさまを思ひいてきこえ給はぬときのまなきにかくてもおはしますまし
うみなほか／＼へといて給ほとにかなしき事かきりなし宮は三条の宮にわたり
給御むかへに兵部卿の宮まいり給へりゆきうちちり風はけしうて院のうちやう
／＼人めかれ行てしめやかなるに大將殿こなたにまいり給てふるき御物かたり
きこえ給おまへの五えうのゆきにしほれてした葉かれたるをみたまひてみこ

かけひろみたのみしまつやかれにけんした葉ちり行としの暮哉なにはかり
のことにもあらぬにおりからものあはれにて大將の御そていたうぬれぬいけの
ひまなうこほれるに

さえわたる池のかゝみのさやけきにみなれしかけをみぬそかなしきとおほ
すまゝにあまりわか／＼しうそあるや王命婦

としくれていはるの水もこほりとちみし人かけのあせも行かなそのついで
にいとおほかれとさのみかきつゝくへき事はわたらせ給きしきかはらねと思
なしにあはれにてふるき宮は返てたひ心ちし給にも御さとすみたえたとし月
のほとおほしめくらさるへしとしかへりぬれと世中いまめかしき事なくしつか
なりまして大將殿はものうくてこもりぬ給へりちもくのころなど院の御時をは
さらにもいはすところおとるけちめなくてみかとのわたり所なくたちこみた
りしむま車うすらきてとのゐ物のふくろおさ／＼みえすしたしきけいしともは
かりことにいそく事なけにてあるをみ給にもいまよりはかくこそはと思やられ
てもものすさましくなむみくしけとのほは二月にないしのかみになり給ぬ院の御思
にやかてあまになり給へるかはりなりけりやむことなくもてなし人からもいと
よくおはすれはあまたまいりあつまり給中にもすくて時めき給後はさとかち
におはしまいてまいり給ふときの御つほねにはむめつほをしたれはこきてんに
はかむの君すみ給ふとう花殿のむもれたりつるにはれはれしうなりて女坊など
もかすしらすつとひまいりていまめかしうはなやき給へと御心の中は思ひのほ
かなりしことゝもをわすれかたくなけき給いとしのひてかよはし給ふ事はなを
おなしさまなるへしものゝきこえもあらはいかならむとおほしなかられいの御
くせなれはいまし御心さしまさるへかめり院のおはしましつる世こそはゝか
り給つれ後の御心いちちやくてかた／＼おほしつめたる事ともものむくひせむと
おほすへかめりことにふれてはしたなきことのみいてくれはかゝるへきことと
はおほししかとみしり給はぬ世のうさにたちまふへくもおほされす左のおほい
とのものすさましき心ちし給てことにうちにもまいり給はすこひめ君をひきよき
てこの大將の君にきこえつけ給ひし御心をきさきはおほしをきてよろしうと思

きこえ給はすおとゝの御中もとよりそはくしうおはするにこ院の御世には
我まゝにおはせしを時うつりてしたりかほにおはするをあちきなしとおほした
ることほりなり大將はありしにかはらすわたりかよひ給ひてさふらひし人人を
も中くこまかにおほしをきてわか君をかしつき思きこえ給へる事かきりな
ければあはれにありかたき御心といとゝいたつききこえ給事とおなしさまな
りかきりなき御おほえのあまりものさはかしまていとまなけにみえ給しをか
よひ給しところくもかたくたえ給事ともありかるくしき御忍ひありき
もあいなうおほしなりてことにし給はねはいのとやかにいましもあらまほし
き御ありさまなりにしのたいのひめ君の御さいはいを世人もめてきこゆ少納言
なども人しれすこあまうへの御いのりのしとみたてまつるちゝみこも思さ
まにきこえかはし給むかひはらのかきりなくとおほすはかくしうもえあら
ぬにねたけなる事おほくてまゝはゝのきたのかたはやすからすおほすへしもの
かたりにことさらにつくりいてたるやうなる御ありさまなり齋院は御ふくにて
おりゐ給にしかはあさかほのひめ君はかはりに給にきかものいつきにはそむ
わうのゐたまふれいおほくもあらさりけれとさるへき女みこやおはせさりけむ
大將の君とし月ふれと猶御こゝろはなれ給はさりつるをかうすちことになり給
ぬれはくちおしくとおほす中將にをとつれ給事もおなしことにて御ふみなどは
たえさるへしむかしにかはる御ありさまなどをはことになにともおほしたらす
かやうのはかなし事ともをまきるゝことなきまゝにこなたかなたとおほしなや
めりみかとは院の御ゆいこむたかへすあはれにおほしたれとわかうおはします
うちにも御心なよひたるかたにすきてつよき所おはしまさぬなるへしはゝきさ
きおほちおとゝとりくし給事はえそむかせ給はすよのまつりこと御心にな
はぬやうなりわつらはしさのみまされとかむの君は人しれぬ御心しかよへはわ
りなくてとおほつかなくはあらず五たんのみすほうのはしめにてつゝしみおほ
しますひまをうかゝひてれいの夢のやうにきこえ給かのむかしおほえたるほそ
とのゝつほねに中納言の君まきはしていれたてまつる人めもしけきころなれ
はつねよりもはしかなる空おそろしうおほゆあさゆふにみたてまつる人たに
あかぬ御さまなれはましてめつらしきほとにのみある御たいめのいかてかはを
ろかならむ女の御さまもけにそめてたき御さかりなるおもりかなるかたはいか
ゝあらむおかしうなまめきわかひたる心ちしてみまほしき御けはひなりほと
くあけゆくにやとおほゆるにたゝこゝにしもとのゐ申さふらふとこはつくるな
りまたこのわたりにかくろへたるこのゑつかさそあるへきはらきたなきかたへ

のをしへをこするそかしと大将はきゝ給をかしきものからわつらはしこゝかし
こたつねありきてとらひとつと申なり女君

心から方々そてをぬらすかなあくとをしふるこゑにつけてもとのたまふ
さまはかなたちていとをかし

なけきつゝわかよはかくてすくせとやむねのあくへき時そともなくしつ心
なくていてたまひぬ夜ふかきあかつき月夜のえもいはすきりわたれるにいい
たうやつれてふるまひなし給へるしもにるものなき御ありさまにて承香殿の御
せうどのとう少将ふちつほよりいてゝ月のすこしくまあるたてしとみのもとに
たてりけるをしらてすき給けんこそいとをしけれもときゝこゆるやうもありな
んかしかやうのことにつけてもてはなれつれなき人の御心をかつはめてたし
と思ひきこえ給物からわか心のひく方にては猶つらう心うしとおほえ給をりお
ほかり内にまいり給はん事はうるゝしく所せくおほしなりて春宮をみたてま
つり給はぬをおほつかなくおもほえ給又たのもしき人もゝのし給はねはたゝこ
の大将の君をそよろつにたのみきこえ給へるに猶このにくき御心のやまぬにと
もすれは御むねをつふし給つゝいさゝかもけしきを御らんししらすなりにしを
おもふたにいとおそろしきにいまさらにまたさる事のきこえありて我身はさる
ものにて春宮の御ためにならすよからぬこといときなんとおほすにいとおそ
ろしければ御いのりをさへせさせてこのこと思やませたてまつらむとおほしい
たらぬ事なくのかれ給をいかなるおりにかありけんあさましてちかつきまい
り給へり心ふかくたはかり給けん事をしる人なかりければ夢のやうにそありけ
るまねふへきやうなくきこえつゝけ給へと宮いとこよなくもてはなれきこえ給
てはてゝは御むねをいたうなやみ給へはちかうさふらひつる命婦弁などそあ
さましてみたてまつりあつかふおとこはうしつらしと思きこえ給事かきりなき
にきしかた行ききかきくらす心ちしてうつし心うせにければあけはてにけれと
いて給はすなりぬ御なやみにおとろきて人々ちかうまいりてしけうまかへはわ
れにもあらでぬりこめにをしいれられておはす御そともかくしもたる人の心ち
ともいとむつかし宮はものをいとわひしとおほしけるに御けあかりて猶なやま
しうせさせ給兵部卿宮大夫なとまいりてそうめせなとさはくを大将いとわひし
うきゝおはすからうしてくれ行程にそおこたり給へるかくこもりぬ給へらむと
はおほしもかけす人々も又御心まとはさしとてかくなんともまうさぬなるへし
ひるのおましにいさりいてておはしますよろしうおほさるゝなめりとて宮もま
かて給ひなとしておまへ人すくなになりぬれいもけちかくならさせ給人すくな

ければこゝかしこのものゝうしろなどにそさふらふ命婦の君などはいかにたはかりていたしたてまつらむこよひさへ御けあからせ給はんいとおしうなうちさゝめきあつかふ君はぬりこめのとのほそめにあきたるをやおらをしあけて御屏風のはさまにつたひ入給ぬめつらしくうれしきにも涙おちてみたてまつり給ふなをいとくるしうこそあれ世やつきぬらむとてとのかたをみいたし給へるかたはらめいひしらすなまめかしうみゆ御くたものをたにとてまいりすへたりはこのふたなどにもなつかしきさまにてあれとみいれたまはす世中をいたうおほしなやめるけしきにてのとかになかめいり給へるいみしうらうたけなりかむさしかしらつき御くしのかかりたるさまかきりなきにほはしさなどたゝかのたいのひめ君にたかふ所なしとしころすこし思ひわすれ給へりつるをあさましきまておほえ給へるかなとみ給まゝにすこしもの思のはるけところある心ちし給けたかうはつかしけなるさまなどもさらにこと人とおもひわきかたきを猶かきりなくむかしよりおもひしめきこえてし心の思ひなしにやさまことにいみしうねひまさり給にけるかなとたくひなくおほえ給に心まとひしてやをらみちやうのうちにかゝつらひ入て御そのつまをひきならし給けはひしるくさにとほひたるにあさましうむくつけうおほされてやかてひれふし給へりみたにむき給へかしと心やましうつらうてひきよせ給へるに御そをすへしをきてあさりのき給に心にもあらず御くしのとりそへられたりけはいと心うくすくせのほとおほししられていみしとおほしたりおともこゝらよをもてしつめ給ふ御心みなみたれてうつしさまにもあらずよろつのことをなくうらみきこえ給へとまことに心つきなしとおほしていらいへもきこえ給はすたゝ心ちのいとなやましきをかゝらぬおりもあらはきこえてむとのたまへとつきせぬ御こゝろの程をいひつゝけ給さすかにいみしときゝ給ふしもまするらんあらさりしことにはあらねとあらためていとくちおしうおほさるればなつかしきものからいとようのたまひのかれてこよひもあけゆくせめてしたかひきこえさらむもかたしけなく心はつかしき御けはひなれはたゝかはかりにてもとき／＼いみしきうれへをたにはるけ侍ぬへくはなにのおほけなき心も侍らしなとためきこえ給へしなのめなる事たにかやうなるなからひはあはれなる事もそふなるをましてたくひなけなりあけはつれはふたりしていみしき事ともをきこえ宮はなかはゝなきやうなる御けしきの心くるしければ世中にありときこしめされむもいとはつかしければやかつてうせ侍なんも又この世ならぬつみとなり侍ぬへき事なときこえ給もむくつきまておほしいれり

あふことのかたきをけふにかきらすはいまいく世をかなけきつゝへん御ほたしにもこそときこえ給へはさすかにうちなけき給て

なかきよのうらみを人にのこしてもかつは心をあたとしらなむはかなくいひなさせ給へるさまのいふよしなき心ちすれと人のおほさむところもわか御ためもくるしければわれにもあらていて給ぬいつこをおもてにてかはまたもみえたてまつらんとおしとおほしするはかりとおほして御ふみもきこえたまはすうちたえて内春宮にもまいり給はすこもりおはしておきふしいみしかりける人の御心かなと人わろく恋しうかなしきに心たましゐもうせにけるにやなやましうさへおほさるもの心ほそくなそや世にふれはうさこそまされとおほしたつにはこの女君のいとらうたけにてあはれにうちたのみきこえ給へるをふりすてむ事いとかたし宮もそのなこりれいにもおはしまさすかうことさらめきてこもりゐをとつれ給はぬを命婦などとはいとおしかりきこゆ宮も春宮の御ためをおほすには御心をき給はむ事いとおしく世をあちきなきものに思ひなり給はゝひたみちにおほしたつ事もやとさすかにくるしうおほさるへしかゝる事たえすはいとゝしき世にうき名さへもりいてなむおほきさきのあるましきことにの給なるくらゐをもさりなんとやうくおほしなる院のおほしの給はせしさまのなのめならさりしをおほしいつるにもよろつのことありしにもあらずかはりゆく世にこそあめれ戚夫人のみけむめのやうにはあらずともかならず人わらへなる事はありぬへき身にこそあめれなと世のうとましくすくしかたうおほさるればそむきなむことをおほしとるに春宮みたてまつらておもかはりせむことあはれにおほさるればしのひやかにてまいり給へり大将の君はさらぬことたにおほしやらぬ事なくつかうまつり給を御心地なやましきにつけて御をくりにもまいり給はすおほかたの御とふらひはおなしやうなれとむけにおほしくしにけると心しるとちはいとおしかりきこゆ宮はいみしうつくしうおとなひ給てめつらしううれしとおほしてむつれきこえ給をかなしとみたてまつり給にもおほしたつすちはいとかたけれとうちわたりをみ給につけても世のありさまあはれにはかなくうつりかはる事のみおほかりおほきさきの御心もいとわつらはしくてかくいて入給にもはしたなくことにふれてくるしければ宮の御ためにもあやうくゆゝしうよろつにつけておもほしみたれて御らむせてひさしからむほとにかたちのことさまにてうたてけにかはりて侍らはいかゝおほさるへきときこえ給へは御かほうちまもり給てしきふかやうにやいかてかさはなり給はんとゑみての給ふいふかひなくあはれにてそれはおいて侍れはみにくきそさはあらてかみはそれ

よりもみしかくてくろきぬなどをきてよるのそうのやうになり侍らむとすれ
はみたてまつらむ事もいと、ひさしかるへきそとてなき給へはまめたちてひさ
しうおはせぬは恋しきものとて涙のおつれははつかしとおほしてさすかにそ
むき給へる御くしはゆらくときよらにてまみのなつかしけににほひ給へるさ
まおとなひ給まゝにたゝかの御かほをぬきすへ給へり御はのすこしくちてくち
のうちくろみてゑみ給へるかほりうつくしきは女にてみたてまつらまほしうき
よら也いとかうしもおほえ給へるこそ心うけれどたまのきすにおほさるゝも世
のわつらはしさの空おそろしうおほえ給也けり大将の君は宮をいと恋しう思ひ
きこえ給へとあさましき御心のほとをとぎくは思しるさまにもみせたてまつ
らむとねんしつゝ、すぐし給に人わるくつれくにおほさるれは秋ののもみたま
ひかてら雲林院にまうて給へり故は、宮すん所の御せうとのりしのこもり給へ
るはうにて法文なとよみをこなひせむとおほして二三日おはするにあはれなる
事おほかりもみちやうくいろいろつきわたりて秋の野のいとなまめきたるなどみ
給てふるさともわすれぬへくおほさるほうしはらのさえあるかきりめしいて、
ろむきせさせてきこしめさせ給所からにいと、世中のつねなさをおほしあかし
てもなをうき人しもそとおほしいてらるゝおしあけかたの月影にほうしはらの
あかたてまつるとてからくとならしつゝ、きくの花こきうすきもみちなどおり
ちらしたるもはかなけれとこのかたのいとなみはこの世もつれくならずの
ちの世はたたのもしけなりさもあちきなき身をもてなやむかなとおほしつゝ、
け給りしのいとたうときこゑにて念仏衆生摂取不捨とうちのへてをこなひ給へ
るはいとうらやましければなそやとおほしなるにまつひめ君の心にかゝりてお
もひいてられ給そいとわろき心なるやれいならぬ日かすもおほつかなくのみお
ほさるれは御文はかりそしけうきこえ給めるゆきはなれぬへしやと心み侍道な
れとつれくもなくさめかたう心ほそさまりてなむきゝさしたる事ありてや
すらひ侍ほといかになとみちのくにかみにうちとけかき給へるさへそめてたき
あさちふの露のやとりに君ををきてよもの嵐そしつ心なきなとこまやかな
るに女君もうちなき給ぬ御返ししろきしきに

風ふけはまつそみたるゝ色かはるあさちか露にかゝるさゝかにとのみあり
て御手はいとおかしうのみなりまさるものかなとひとりこちてうつくしとほゝ
ゑみ給つねにかきかはし給へはわか御てにいとよくにしていますこしなまめかし
う女しき所かきそへ給へりなに事につけてもけしうはあらすおほしたてたりか
しとおもほすふきかふ風もちかきほとにて齋院にもきこえ給けり中将の君にか

くたひの空になむもの思にあくかれにけるをおほししるにもあらしかしなとう
らみ給ておまへには

かけまくはかしこけれどもその神のあきおもほゆるゆふたすきかなむかし
をいまにと思たまふるもかひなくとりかへされむものゝやうにとなれくしけ
にからの浅みとりのかみにさかきにゆふつけなとかうくしうしなしてまいら
せ給御かへり中将まきるゝ事なくてきしかたのことを思たまへいつるつれく
のまゝにはおもひやりきこえさする事おほく侍れとかひなくのみなむとすこし
心とゝめておほかりおまへのはゆふのかたはしに

その神やいかゝはありしゆふたすき心にかけてしのふらんゆへちかき世に
とそある御てこまやかにはあらねとらうくしうさうなとおかしうなりにけり
まして朝かほもねひまさり給へらむかしとおもほゆるもたたならすおそろしや
あはれこのころそかしのゝ宮のあはれなりしことゝおほしいてゝあやしうやう
の物と神うらめしうおほさるゝ御くせのみくるしきそかしわりなうおほさはさ
もありぬへかりしところはこのとかにすくい給ていまはくやしうおほさるへか
めるもあやしき御心なりや院もかくなへてならぬ御心はへをみしりきこえ給へ
れはたまさかなる御返などとはえしもゝてはなれきこえ給ましかめりすこしあひ
なき事なりかし六十巻といふふみよみ給ひおほつかなき所くとかせなどして
おはしますを山寺にはいみしき光おこなひいたしたてまつれりとほとけの御め
んほくありとあやしのほうしはらまてよろこひあへりしめやかにて世中をおも
ほしつゝくるにかへらむ事もゝのうかりぬへけれと人ひとりの御事おほしやる
かほたしなれはひさしうもえおはしまさて寺にもみす経いかめしうせさせ給あ
るへきかきりかみしものそうともそのわたりの山かつまでものたひたうとき事
のかきりをつくして給みたてまつりをするとしてこのもかのもにあやしきし
はふるひとゝあつまりてゐて涙をおとしつゝみたてまつるくろき御車のうち
にてふちの御たもとにやつれ給へれはことにみえ給はねとほのかなる御ありさ
まを世になく思きこゆへかめり女君はひころのほとにねひまさり給へる心ちし
ていといたうしつまり給て世の中いかゝあらむとおもへるけしきの心くるしう
あはれにおほえ給へはあいなき心のさまくみたるゝやしるからむ色かはると
ありしもらうたうおほえてつねよりことにかたらひきこえ給山つとにもたせ給
へりしもみちおまへのに御らんしくらふれはことにそめましける露の心もみす
くしかたうおほつかなさも人わるきまておほえ給へはたゝおほかたにて宮にま
いらせ給命婦のもとにいらせ給にけるをめつらしき事とうけ給はるに宮のあひ

たの事おほつなくなり侍にければしつ心なく思給へなからをこなひもつとめ
むなど思たち侍し日かすを心ならずやとてなん日ころになり侍にけるもみちは
ひとりみ侍ににきくらう思たまふれはなむおりよくて御らんせさせ給へなど
ありけにいみしきえたともなれは御めとまるにれいのいさゝかなるものありけ
り人々みたてまつるに御かほの色もうつろひて猶かゝる心のたえ給はぬこそい
とうとましけれあたら思ひやりふかうものし給人のゆくりなくかうやうなる事
おりくませ給を人もあやしとみるらむかしと心つきなくおほされてかめにさ
ゝせてひさしのはしらのもとにおしやらせ給つおほかたのことゝも宮の御事に
ふれたる事などをはうちたのめるさまにすぐよかなる御かへりはかりきこえ給
へるをさも心かしこくつきせすもとうらめしうはみ給へとなに事もうしろみき
こえならひ給にたれは人あやしとみとかめもこそすれとおほしてまかて給へき
ひまいり給へりまつ内の御方にまいり給へれはのとやかにおはしますほにて
むかしいまの御物かたりきこえ給御かたちも院にいとようにたてまつり給てい
ますこしなまめかしきけそひてなつかしうなやかにそおはしますかたみにあ
はれとみたてまつり給かむの君の御事もなをたえぬさまにきこしめしけしき御
らんするおりもあれとなにかはいまはしめたる事ならばこそあらめさも心かは
さむににけなかるましき人のあはひなりかしとそおほしなしてとかめさせ給は
さりけるよろつの御物かたり文の道のおほつかなくおほさるゝ事ともなどとは
せ給て又すきくしきうたかたりなともかたみにきこえかはさせ給ついてにか
の齋宮のくたり給ひしひの事かたちのおかしくおはせしなとかたらせ給にわれ
もうちとけて野の宮のあはれなりしあけほのみなきこえいて給てけり廿日の
月やうくさしいてゝおかしきほとなるにあそひなともせまほしきほとかなと
のたまはす中宮のこよひまかて給なるとふらひにものし侍らむ院のたまはせ
をく事はへりしかは又うしろみつかうまつる人も侍らさめるに春宮の御ゆかり
いとおしう思給へられ侍てとそうし給春宮をはいまのみこになしてなどのたま
はせをきしかはとりわきて心さしものすれとことにさしわきたるさまにもなに
事をかはとてこそとしのほとよりも御てなどのわさとかしこうこそものし給へ
けれなにことにものはかくしからぬ身つかからのおもておこしになむとのたまは
すれはおほかたし給わさなといとさとくおとなひたるさまにものし給へとまた
いとかたなりになとその御ありさまもそうし給てまかて給に大宮の御せうとの
藤大納言のこの頭弁といふかよにあひはなやかなるわか人にておもふ事なきな
るへしいもうとのれいけいてんの御かたにゆくに大将の御さきをしのひやかに

をへはしはしたちとまりて白虹日をつらぬけり太子をちたりといとゆるらかに
うちすしたるを大將いとまはゆしときゝ給へととかむへき事かはきさきの御け
しきはいとおそろしうわつらはしけにのみきこゆるをかうしたしき人々もけし
きたちいふへかめる事ともあるにわつらはしうおほされけとつれなうのみ
もてなし給へりおまへにさふらひていまゝてふかし侍にけるとときこえ給月のほ
なやかなるにむかしかうやうなるおりは御あそひせさせ給ていまめかしうもて
なさせ給しなとおほしいつるにおなしみかきのうちなからかはれる事おほくか
なし

九重に霧やへたつる雲のうへの月をはるかに思やるかなと命婦してきこえ
つたへ給ふほとなれば御けはひもほのかなれとなつかしうきこゆるにつらさ
もわすられてまつ涙そおつる

月影はみし夜の秋にかはらぬをへたつる霧のつらくもあるかなかすみも人
のとかむかしも侍ける事にやなときこえ給宮は春宮をあかす思きこえ給てよろ
つの事をきこえさせ給へとふかうもおほしいれたらぬをいとしろめたく思ひ
きこえ給れいはいとゝくおほとのもるをゐて給まてはおきたらむとおほすな
るへしうらめしけにおほしたれとさすかにえしたひきこえ給はぬをいとあはれ
とみたてまつり給大將頭弁のすしつることを思ふに御心のおにゝ世中わつらは
しうおほえ給てかむの君にもをとつれきこえ給はてひさしうなりにけりはつし
くれいつしかとけしきたつにいかゝおほしけんかれより

木からしのふくにつけつつまちしまにおほつかなさのころもへにけりとき
こえ給へりおりもあはれにあなかにしのひかき給へらむ御心はへもにくから
ねは御つかひとゝめさせてからのかみともいれさせ給へるみすしあけさせ給い
てなへてならぬをえりいてつつふてなとも心ことにひきつくろひ給へるけしき
えんなるをおまへなる人々たればかりならむとつきしろふきこえさせてもかひ
なきものこりにこそむけにくつをれにけれ身のみものうきほとに

あひみすてしのふるころのなみたをもなへてのそらのしくれとやみる心の
かよふならはいかになかめの空もものわすれし侍らむなとこまやかににけり
かうやうにおとろかしきこゆるたくひおほかめれとなさけなからすうちかへ
りこち給て御心にはふかうしまさるへし中宮は院の御はてのことにうちつゝき
御八講のいそきをさまゝに心つかひせさせ給けりしも月のついたち比御こき
なるに雪いたうふりたり大將殿より宮にきこえ給

別にしけふはくれともみし人にゆきあふほとをいつとたのまんいつこにも

けふはものかなしうおほさるゝほとにて御返あり

なからふるぼとはうけれとゆきめぐりけふはその世にあふ心ちしてことに
つくろひてもあらぬ御かきさまなれとあてにけたかきはおもひなしなるへしす
ちかはりいまめかしうはあらねと人にはことにかゝせ給へりけふはこの御事も
思ひけちてあはれる雪のしづくにぬれくをこなひ給十二月十よ日はかり中
宮の御はかうなりいみしうたうとし日々にくやうせさせ給御経よりはしめたま
のちくらのへうしちすのかさりもよになきさまにとゝのへさせ給へりさらぬ事
のきよらたに世のつねならすおはしませはましてことはり也仏の御かさり花つ
くゑのおほひなとまでまことのこくらく思やらるはしめの日は先帝の御れうつ
きの日ははゝきさきの御ためまたの日は院の御れう五巻の日なれはかたちめ
などもよのつゝましさをえしもはゝかり給はていとあまたまいり給へりけふの
かうしは心ことにえらせ給へれたきゝこるほとよりうちはしめおなしういふ
事のはもいみしうたうとしみこたちもさまくのほうもちささけてめぐり給に
大将殿の御よういなとなをにるものなしつねにおなし事のやうなれとみたてま
つるたひことにめつらしからむをはいかゝはせむはての日わか御事を結願にて
世をそむき給よし仏に申させ給にみな人ゝおとろき給ぬ兵部卿宮大将の御心も
うこきてあさましとおほすみこはなかはのほとにたちていり給ぬ心つようおほ
したつさまの給てはつるほとに山の座主めしていむ事うけたまふへきよしの給
はす御をちのよかわのそうつちかうまいり給て御くしおろし給程に宮のうちゆ
すりてゆゝしうなきみちたりなにとなきおいおとろへたる人たにいまはとよを
そむく程はあやしうあはれるわさをましてかねての御けしきにもいたし給は
さりつる事なれはみこもいみしうなき給まいり給へる人ゝもおほかたの事のさ
まもあはれたうとければみな袖ぬらしてそかへり給けるこ院のみこたちはむか
しの御ありさまをおほしいつるにいとゝあはれにかなしうおほされてみなどふ
らひきこえ給大将はたちとまり給てきこえいて給へきかたもなくくれまとひて
おほさるれととかさしもと人みたてまつるへければみこなといて給ぬるのち
にそおまへにまいり給へるやうく人しつまりて女ほうともはなうちかみつゝ
所ゝにむれるたり月はくまなきに雪のひかりあひたるにはのありさまもむかし
の事おもひやらるゝにいとたへかたうおほさるれといとようおほししつめてい
かやうにおほしたゝせ給てかうにはかにはときこえ給いまはしめておもひ給ふ
ることにもあらぬをものさはかしきやうなりつれは心みたれぬへくなとれいの
命婦してきこえ給みすのうちのけはひそこらつとひさふらふ人のきぬのをとな

ひしめやかにふるまひなしてうちみしろきつゝ、かなしけさのなくさめかたけにもりきこゆるけしきことはりにいみしとき、給風はけしう吹ふゝきてみすのうちのほひいとのふかきくろほうにしみてみやうかうのけふりもほのかなり大将の御にほひさへかほりあひめてたくこくらく思ひやらるる世のさまなり春宮の御つかひもまいりの給ひしさま思ひいてきこえさせ給にぞ御心つよさもたへかたくて御返もきこえさせやらせ給はねは大将そ事くはへきこえ給けるたれもゝあるかきり心おさまらぬほとなれはおほす事ともゝえうちいて給はす月のすむ雲井をかけてしたふともこの世のやみに猶やまとはむと思給へらるゝこそかひなくおほしたゝせ給へるうらめしさはかきりなうとはかりきこえ給て人ゝちかうさふらへはさまゝみたるゝ心のうちをたにえきこえあらはし給はすいふせし

おほふかたのうきにつけてはいとへともいつかこの世をそむきはつへきかつにこりつゝ、などかたへは御つかひの心しらひなるへしあはれのみつきせねはむねくるしうてまかて給ぬとのにてもわか御かたにひとりうちふし給て御めもあはす世中いとはしうおほさるゝにも春宮の御事のみそ心くるしきは、宮をたにおほやけかたさまにとおほしをきしを世のうさにたへすかなり給にたれはもとの御くらゐにてもえおはせし我さへみたてまつりすてゝはなとおほしあかすことかきりなしいまはかゝるかたさまの御てうとともをこそはとおほせは年のうちにといそかせ給命婦の君も御ともになりにつければそれも心ふかうとふらひ給くはしういひつゝ、けんにとゝしきさまなれはもらしてけるなめりさるはかうやうのおりこそおかしきうたなといてくるやうもあれさうゝしやまいり給もいまはつゝ、ましさうすらきて御身つからきこえ給おりもありけり思ひしめてし事はさらに御心にはなれねとましてあるましき事なりかしとしもかはりぬれはうちわたりはなやかに内えむたうかなときゝ給ももののみあはれにて御をこなひしめやかにし給つゝ、のちの世の事をのみおほすにたのもしくむつかしかりし事はなれておもほさるつねの御ねむすたうをはさるものにてことにたてられたるみたうのにしのたいのみなみにあたりてすこしはなれたるにわたらせ給てとりわきたる御をこなひせさせ給大将まいり給へりあらたまるしるしもなく宮のうちのとかに人めまれにて宮つかさともものしたしきはかりうちうなたれてみなしにやあらむくしいたけにおもへりあをむまはかりそなをひきかへぬものにて女ほうなどのみけるところせうまいりつとひ給しかむたちめなど道をよきつゝ、ひきすきてむかいのおほいどのにつとひ給ふをかゝるへき事なれとあは

れにおほさるゝに千人にもかへつへき御さまにてふかうたつねまいり給へるを
みるにあひなくなみたくまるまらうともいど物あはれなるけしきにうちみまは
し給てとみにものの給はすさまかはれる御すまゐるにみすのはし御き丁もあを
にひにてひまゝよりほのみえたるうすにひくちなしのそてくちなと中ゝな
まめかしうおくゆかしう思ひやられ給とけわたるいけのうすこほりきしの柳の
けしきはかりはときをわすれぬなどさまゝなかめられ給てむへも心あるとし
のひやかにうちすし給へるまたなうなまめかし

なめかるあまのすみかとみるからにまつしほたるゝまつかうら島ときこ
え給へはおくふかうもあらすみなほとけにゆつりきこえ給へるおましところな
れはすこしけちかき心地して

ありし世のなこりたになきうらしまにたちよる浪のめつらしきかなとの給
ふもほのきこゆれはしのふれと涙ほろゝとこほれ給ぬ世をおもひすましたる
あま君たちのみるらむもはしたなければことすくなにていて給ぬさもたくひな
くねひまさり給かな心もとなき所なく世にさかへ時にあひ給し時はさるひとつ
ものにてなにゝつけてか世をおほししらむとをしはかられ給しをいまはいとい
たうおほししつめてはかなきことにつけてもものあはれなるけしきさへそはせ
給へるはあいなう心くるしうもあるかななどおいしらへる人ゝうちなきつゝめ
てきこゆ宮もおほしいつる事おほかりつかさめしのころこの宮の人は給はるへ
きつかさもえすおほかたのたうりにても宮の御給はりにてもかならずあるへき
かゝいなとをたにせずなとしてなけたくひいとおほかりかくてもいつしかと
御くらゐをさりみふなどのとまるへきにもあらぬをことつけてかはる事おほか
りみなかねておほしすてゝしよなれと宮人ともゝより所なけにかなしとおもへ
るけしきともにつけてそ御心うこくおりゝあれとわか身をなきになしても春
宮の御世をたひらかにおはしまさはとのみおほしつゝ御をこなひたゆみなくつ
とめさせ給ふ人しれすあやうくゆゝしう思ひきこえさせ給事しあれば我にその
つみをかるめてゆるし給へと仏をねむしきこえ給によろつをなくさめ給大將も
しかみたてまつり給てことはりにおほすこのとのゝ人ともゝ又おなしきさまに
からき事のみあれば世中はしたなくおほされてこもりおはす左のおとゝもおほ
やけわたくしひきかへたる世のありさまにものうくおほして致仕のへうたてま
つり給をみかとは故院のやむ事なくおもき御うしろみとおほしてなかきよのか
ためときこえをき給し御ゆいこんをおほしめすにすてかたきものに思ひきこえ
給へるにかひなきことゝたひゝもちゐさせ給はねとせめてかへさひ申給てこ

もりゐたまひぬいまはいとゝひとそうのみかへすゝさかえ給事かきりなしよ
のおもしものし給へるおとゝのかく世をのかれ給へはおほやけも心ほそうお
ほされ世の人も心あるかきりはなけきり御こともはいつれともなく人からめ
やすく世にもちいられて心地よけにものし給しをこよなうしつまりて三位中将
などもよを思しつめるさまこよなしかの四の君をもなをかれゝにうちかよひ
つゝめさましうもてなされたれは心とけたる御むこのうちにもいれ給はす思ひ
しれとにやこのたひのつかさめしにももれぬれといとしもおもひいれす大將殿
かうしつかにておはするに世はゝかなきものとみえぬるをましてことほりとお
ほしなしてつねにまいりかよひ給つゝかくもむをもあそひをももろともにし給
いにしへもゝのくるおしきまていとみきこえ給しをおほしいてゝかたみにいま
もはかなきことにつけつゝさすかにいとみ給へり春秋のみと経をはさるものに
てりんしにもさまゝたうとき事ともをせさせ給なとして又いたつらにいとま
ありけなるはかせともめしあつめてふみつくりゐむふたきなどやうのすさひわ
さともをもしなど心をやりてみやつかへをもおさゝし給はす御心にまかせて
うちあそひておはするを世中にはわつらはしき事ともやうゝいひいつる人ゝ
あるへしなつのあめのとかにふりてつれゝなるころ中将さるへきしふともあ
またもたせてまいり給へりとのにもふとのあけさせ給てまたひらかぬみすしと
ものめつらしき古集のゆへなからぬすこしえりいてさせ給てその道の人ゝわさ
とはあらねとあまためしたり殿上人も大かくのめいとおほうつとひて左右にこ
まとりにかたわかせ給へりかけものともなといとになくていとみあへりふたき
もてゆくまゝにかたきゐんのもしともいとおほくておほえあるはかせともなど
のまゝとふ所ゝを時ゝうちの給さまいとこよなき御さえのほとなりいかてか
うしもたらひ給ひけんなをさるへきにてよろつの事人にすぐれ給へるなりけり
とめてきこゆつゐに右まけにけり二日はかりありて中将まけわさし給へりこと
ゝしうはあらてなまめきたるひわりこともかけものなどさまゝにてけふも
れいの人ゝおほくめしてふみなとつくらせ給はしものとのさうひけしきはかり
さきて春秋の花さかりよりもしめやかにおかしきほとなるにうちとけあそひ給
中将の御このことはしめて殿上するやつこゝのつはかりにてこゑいとおもろ
しくさうのふゑふきなどするをうつくしひもてあそひ給四の君はらの二らうな
りけり世の人の思へるよせおもくておほえことにかしつけり心はへもかとゝ
しうかたちもおかしくて御あそひのすこしみたれゆく程にたかさこをいたして
うたふいとうつくし大將の君御そぬきてかつけ給れいよりはうちみたれ給へる

御かほのほひにるものなくみゆうすもの、なをしひとへをきたまへるにすぎ
給へるはたつきましていみしうみゆるをとしおいたるはかせともなど、をくみ
たてまつりて涙おとしつゝゐたりあはまし物をさゆりはのとうたふとちめに中
将御かはらけまいり給

それもかときさひらけたる初花におとらぬ君かにほひをそみるほをゑみて
とり給

ときならてけさ咲はなは夏の雨にしほれにけらしにほふほとなくおとろへ
にたるものをとうちそうときてらうかはしくきこしめしなすをとかめいてつゝ
しるきこえ給ふおほかめりし事とも、かうやうなるおもりのまほならぬ事かす
くゝにかきつくる心地なきわさとかつらゆきかいさめたうるかたにてむつか
しければとゝめつみなこの御事をほめたるすちにのみやまとのもからのもつく
りつれたりわか御心地にもいたうおほしおこりて文王の子武王のおとうとゝう
ちすし給へる御なのりさへそけにめてたき成王のなにとかの給はむとすらむそ
れはかりやまた心もとなからむ兵部卿宮もつねにわたり給つゝ御あそひなども
おかしうおはする宮なれはいまめかしき御あそひともなりそのころかむの君ま
かて給へりわらはやみにひさしうなやみ給てましなひなども心やすくせんとて
なりけりすほうなどはしめてをこたり給ぬれはたれもくゝうれしうおほすにれ
いのめつらしきひまなるをときこえかはし給てわりなきさまにてよなくゝたい
めし給いとさかりにゝきわゝしきけはひし給へる人のすこしうちなやみてやせ
くゝになり給へるほいとおかしけなりきさいの宮もひとところにおはするこ
ろなれはけはひいとおそろしけれとかゝることしもまさる御くせなれはいとし
のひてたひかさなりゆけはけしきみる人ゝもあるへかめれとわつらはしうて宮
にはさなむとけいせすおとゝはた思かけ給はぬに雨にはかにおとろくゝしうふ
りて神いたうなりさはくあかつきにとのゝきむたち宮つかさなどたちさはきて
こなたかなたの人めしけく女房とも、をちまとひてちかうつとひまいるにいと
わりなくいて給はんかたなくてあけはてぬみ帳のめくりにも人々しけくなみる
たれはいとむねつふらはしくおほさる心しりの人ふたりはかり心をまとはす神
なりやみ雨すこしをやみぬるほにおとゝわたり給てまつ宮の御かたにおはし
けるをむら雨のまきれにてえしり給はぬにかろらかにふとはひいり給てみすひ
きあけ給まゝにいかにそいとうたてありつる夜のさまに思ひやりきこえなから
まいりこてなむ中将宮のすけなとさふらひつやなどのたまふけはひのしたとに
あはつけきを大将はものゝまきれにも左のおとゝの御ありさまふとおほしくら

へられてたとしへなうそほゝゑまれ給けにいりはてゝものたまへかしなむの
君いとわひしうおほされてやをらいさりいて給におもてのいたうあかみたるを
猶なやましうおほさるゝにやとみたまてなと御けしきのれいならぬものゝけな
とのむつかしきをすほうのへさすへかりけりとの給ふにうすふたあひなるおひ
の御そにまつはれてひきいてられたるをみつけ給てあやしとおほすに又たゝむ
かみのてならひなとしたるみきてうのもとにおちたりこれはいかなるものとも
そと御心おとろかれてかれはたれかそけしきことなるものゝさまかなたまへそ
れとりてたかそとみ侍らむとの給ふにそうちみかへりてわれもみつけ給へるま
きはすへきかたもなければいかゝはいらへきこえ給はむわれにもあらておほ
するをこなからもはつかしとおほすらむかしとさはかりの人はおほしはゝかる
へきそかしされといときうにのとめたるところおはせぬおとのおほしもまは
さすなりてたゝうかみをとり給まゝにきてうよりみいれ給へるにいたうな
よひてつゝましからすそひふしたるをともありいまそやおらかほひきかくし
てとかうまきはすあさましうめさましう心やましけれとひたをもてにはいか
てかあらはしたまはむめもくるゝ心地すれはこのたゝむかみをとりてしむてん
にわたり給ぬかむの君はわれかの心地してしぬへくおほさる大將殿もいとおし
うつゐにようなきふるまひのつもりて人のもときをおはむとする事とおほせと
女君の心くるしき御けしきをとかくなくさめきこえ給おとゝはおもひのまゝに
こめたる所おはせぬ本上にいとゝおいの御ひかみさへそひ給にこれはなに事に
かはとゝこほり給はんゆくゝと宮にもうれへきこえ給かうゝの事なむ侍こ
のたゝむかみは右大將のみてなりむかしも心ゆるされてありそめにける事なれ
と人からよろつのつみをゆるしてさてもみむといひ侍しおりは心もとゝめす
めさましけにもてなされにしかはやすからす思給へしかとさるへきにこそはと
てよにけかれたりともおほしすつましきをたのみにてかくほいのことくたてま
つりなからなをそのはゝかりありてうけはりたる女御なともいはせ給ぬをたに
あかすくちおしうおもひ給ふるに又かゝる事さへ侍ければさらにいと心うくな
む思なり侍ぬるおとこのれいとはいひなから大將もいとけしからぬみ心なりけ
り齋院をも猶きこえをかしつゝしのひに御ふみかよはしなとしてけしきある事
なと人のかたり侍しをも世のためのみにもあらずわかためもよかるましき事な
れはよもさるおもひやりなきわさしいてられしとなむときのいうそくとあめの
したをなひかし給へるさまことなめれは大將のみ心をうたかひ侍らさりつるな
との給ふに宮はいとゝしき御心なれはいとものしき御けしきにてみかとゝきこ

ゆれとむかしよりみな人おもひおとしきこえて致仕のおとゝも又なくかしつく
ひとつむすめをこのかみの坊にておはするにはたてまつらておとうとの源氏に
ていときなきか元服のそひふしにとりわき又この君をもみやつかへにと心さし
て侍しにおこましかりしありさまなりしをたれもくあやしとやはおほした
りしみなかのみかたにこそ御心よせ侍めりしをそのほいたかふさまにてこそは
かくてもさふらひ給ふめれといとおしさにいかてさるかたにても人におとらぬ
さまにもてなしきこえんさはかりねたけなりし人のみる所もありなとこそは思
ひ侍つれとしのひてわか心のいるかたになひき給にこそは侍らめ齋院の御事は
ましてさもあらんなに事につけてもおほやけの御かたにうしろやすからすみゆ
るは春宮の御よ心よせことなる人なれはことほりになむあめるとすくくしう
の給ひつゝくるにさすかにいとおしうなときこえつる事そとおほさるればさは
れしはしこのこともらし侍らし内にもそうせさせ給なかくのことつみ侍ともお
ほしすつましきをたのみにてあまえて侍なるへしうちくにせいしの給はむに
きゝ侍らすはそのつみにたゝ身つからあたり侍らむなときこえなをし給へとこ
とに御けしきもなをらすかくひと所におはしてひまもなきにつゝむところなく
さていりものせらるらむはことさらにかろめろうせらるゝにこそはとおほしな
すにいとゝいみしうめさましくこのついてにさるへき事ともかまへいてむによ
きたよりなりとおほしめくらすへし